動員されて、峻険な山上へ、材木や石を運び上げさせられる苦痛は想像にあまりある。宇佐神領では、障子岳築城役を勤める代わりに、宇佐宮社殿造替人夫を勤めることを赦されているが、大永三年の陣夫役については、陣夫日数の三倍の社用人足を勤めることになっている（『小山田文書』）。

明応六年二月、大友親治は求菩提山領三〇町を還附している。『佐田文書』によると、大友氏の豊前進入は明応七年十月となっている。明応六年には、豊前国守護職を公方義澄によって、大友親治へ与えられていたのであろうか。

このころ、国東の武蔵田原氏は京都郡内で、下崎一五町、荒津に二〇町、稲光五〇町、入学で二〇町、黒田に二〇町、津隈庄に三〇町分を預け置かれている。京都郡奉行か城督に配置されたらしい（『田原達三郎文書』）。

一一　朽網親満の乱と伊良原

宇佐宮の下宮社司永弘家の文書に、次のような史料がある。断簡であるため判読に苦しむが、今まで、知られていなかった伊良原に関するものであるから引用してみたい。

一、古庄右馬助（治重）方の事、一段帳（張）行仰せ□（付カ）られ、去る八月廿六日より、父子共、府中（大分市）ニ召し籠め候、色々儀を以て、旧冬十一日この境へ越され候て、吉弘新兵衛（親就）方・小田原兵部方・倉成縫殿亮方同道候て朽網方宿所道陽寺（場）え越され、国中の儀、穏蜜（密）を以て相談し候、御人躰の儀、いかが有るべきの通り、かの方申され候の処、この間申し定む分ニ候由、親満（朽網）申され候、その儀相定め候ひおわんぬ。同心申し難き通り、古も（古庄）候、吉も（吉弘）候、しさいニ申され候

一、この儀につき、一万田六郎方十二月廿日、日田方へ越され候、同廿三日日田境伊らわら申す在所へ、親満、宿を替えられ候、同廿九日頃、かの四人方へ飛脚を遣わされ、早々伊良原のごとく御越候へ、相談申すべき子細申され候、この儀につき、かの四人、今月三日早朝、伊良原様ニ越され候て、去る九日帰宅し候、□（原漢文体）

この意味を要約すると、豊後で挙兵に失敗して豊前へ遁れてきた朽網親満（くたんちかみつ）が道場寺（行橋市）に潜伏していたが、永正十三年（一五一六）十二月二十三日、伊良原へ移って、再挙兵のことを国東の四人と相談しようとしているのである。

朽網氏は、大友氏初代の能直に従って関東から豊後へ下向し、直入郡朽網郷（久住・直入町境付近）に住み、近辺の大野郡や玖珠郡にも所領を広げていた。嘉吉の乱（一四四一）のころより、備後入道法祥―繁貞―親満と三代にわたって大友氏家老（加判衆という）を務めた。特に親満は、肥後の菊池氏滅亡に殊功を挙げ、明応六年（一四九七）ごろより永正八年（一五一一）ごろまで加判衆を務めたが、大友義長の勘気でも受けたのか、加判衆から外され、義長の子義鑑の代初めである永正十三年、「陰謀人」として成敗を受けた。一命を免れた親満与同者は、一部は日向や肥後へ遁れ、一部は玖珠郡高勝寺城（切株山）や松木城等に籠城したが、親満は豊前道場寺へ遁れていたのである。玖珠郡に籠城した一部の

大聖院宗心の花押

田原親述の花押

朽網親満の花押

者は落城して、宇佐郡大副村（院内町）に乱入して、佐田氏らに討伐された。

親満は伊良原から彦山の旧恩を頼って匿われ、永正十五年八月ごろ、豊後府中の高崎山へ忍び上り挙兵した。この時、国東の領主田原三兄弟（親述・政定・興直）も周防か筑前に亡命していて、帰国しようとしたらしい。田原親述は、母が杉三河守重隆の娘であったことから、大内氏と親しく、弟の興直も大内義興の一字を頂戴して家来となっていたらしい。親述は杉重隆の家来として永年、周防で奉公生活したのち帰国して宇佐宮番長の座に就いた永弘氏輔や、市河親泰・得永新左衛門ら元大友家重臣と連絡をとりあって大聖院宗心を大友家家督としようと画策していた。朽網親満が「陰謀人」と見なされたのは大聖院宗心に加担したことを意味するのかもしれない。

数か月後、高崎城は落城し、親満・親述らは筑前に逃れ、立花城や糸島の大友領を侵した。大内義興の了解を得た行動らしい。

この事件は永正十三年から十六年にかけて、四年間もつづいた豊後国の政情不安であり、これに根をもった大友義鑑は一五年後、大内義隆と大戦争を起こすことになる（『大分歴史事典』中世「朽網親満の乱」「大聖院宗心」）。

このころ、馬岳城や障子岳城には城督を置き、近辺の武士を交替で詰めさせていたらしく、下毛郡の神領に課していた宇佐宮の宮番を勤めない石井三郎方抱分は、親の兵庫助の給地で、今は**馬岳城番**を勤めているので、宮番のことは知らない旨の請文を出したという（『永弘文書』）。

享禄四年（一五三一）ごろ、防長の武士長岡実勝は遠田興兼に従って、豊前の亀尾城・妙見尾と父盛実の代から在城し、近年は**障子岳**に在城していると述べている（『萩藩閥閲録』所収『長岡文書』）。

一二　大内義隆と大友義鑑の対立

大内義隆と大友義鑑の正面衝突は、享禄四年（一五三一）、大友分国筑後に侵入した菊池義武（実は大友義鑑の弟で、菊池氏断絶後、養子となって再興）を大内義隆が加勢したことにはじまる。

これに対して、大友義鑑は肥前の多久で逼塞していた少弐資元を担ぎ出して、旧領筑前国へ侵入させ、太宰府を陥れさせた。大内義隆はこの機をとらえて、大友氏の筑前所領糸島・立花城を接収し、豊後の国東を逃れて亡命生活を送っていた田原親述の子親董に預けたらしい。

大友義鑑の豊前侵入　天文元年（一五三二）十月、大友義鑑は豊前へ進入し、宇佐郡の妙見岳城を包囲し、一軍は下毛郡の万代平城（耶馬渓町福土）を攻めて、郡代野仲五郎ら下毛郡衆と十二月八日、正月八日と合戦した。

防州勢は豊前へ渡海して、妙見岳麓において、十月三十日、十一月九日、同十四日と豊後勢と衝突し、天文二年正月十日撤退させた。

今度は、防州勢が豊後に侵入して速見郡鹿越城を占領したが、すぐ反撃されて、天文三年二月二十日には逆に佐田方へ攻撃してきた。

勢場が原合戦　同年四月六日、速見郡に侵入した防州勢は勢場が原（大牟礼山）で豊後速見・国東郡衆と大規模な合戦を繰り広げ、吉弘石見守氏直ら多数を戦死させる勝利を収めたが、豊後の別働隊が防州勢の油断をついて敗走させた。このころ、国東の姫島沖や